

小林禎作先生を偲んで

北海道大学低温科学研究所教授、小林禎作先生は、去る3月8日呼吸不全のため御逝去されました。先生は、「雪の結晶習性に関する研究」に対して昭和35年度気象学会賞を受賞されるなど雪の結晶の研究一筋の道を歩まれました。また、当支部常任理事及び気象集誌編集委員などとして学会発展のため御尽力されておりました。先生の業績や略歴の詳細については他に譲り、私は生前の先生の思い出について述べたいと思います。

私が大学院生として初めて先生の教えを受けたのは、先生が米国のNCARから帰国された直後の昭和48年の頃でした。私の学生時代と重なる様に、先生は雪の双晶の構造と生成機構の研究を精力的に進められ、私もこの研究に参加させていただきました。先生はこの研究の中で、自然の雪の結晶、中でも従来あまり注目されることのなかった多結晶の雪を再び詳しく観察し直す必要を感じられ、



昭和50年から4～5年にわたり勇駒別（旭岳温泉）において雪の観察の機会をもたれました。毎回先生は先頭に立って観察に出かけられ、私たちと同じ室に寝泊まりされて観察にあたられていました。厳しい寒さの中で先生は実に楽しそうに何時間でも仕事を続けられていたのが思い出されます。その後も数年おきにこの観察の機会を持たれ、実験あるいは理論的研究に限らず自然現象を注視することの大切さを示されていました。先生がお亡くなりになった時も、たまたま研究室の人たちがこの観察に出かけている間に急に容体が悪化されたと聞いています。

先生は御自身が面白いと思ったことを自らの目で観察した事実に基づいて追求するすぐれた実験物理屋でありました。私は先生自ら実験されているお姿を拝見する機会があまりありませんでしたが、私たちの行う実験に対して常に鋭く適切なアドバイスを授けられていました。また先生は、雪の結晶の研究を雲物理学の視点ばかりではなく、結晶成長学の視点からも行うことの重要性を常に主張されていました。このような視点に立った先生の多くの業績は、両方の分野から高く評価されています。

活発な研究活動の一方で先生は多彩な趣味の持ち主でもありました。社交ダンス、写真そして最近では帆船模型造りとどれをとっても玄人はだしでした。また先生は雪の結晶に関する啓蒙書を多数著わされたり、北大放送講座の主任講師を務められるなど、啓蒙活動にも力をそそがれました。

私は先生の訃報を出張先の米国で聞くことになり、そのあまりに早い御他界に深い悲しみをおぼえます。今頃先生は、先生の随筆集「雪に魅せられた人々」の中に登場する人たちの仲間に加わり、「雪の結晶」談義でもなさっているのかも知れません。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

（北大低温研 古川 義純）